

# 自らすすめる学びの様相に関する研究

—異学年総合「テーマ別選択学習」を調査例として—

○金崎 鉄也<sup>A</sup> 戸北 凱惟<sup>B</sup>

上越教育大学大学院<sup>A</sup> 上越教育大学<sup>B</sup>

〔キーワード〕 自らすすめる学び 学び合い 学びがい 異学年学習

## 1 研究の背景

多様な学習形態や指導体制の工夫が今次学習指導要領にもりこまれ、総合的な学習の時間などで、異学年集団の学習活動も求められるようになってきた。そこでは、子どもたち主体の学びの実現がめざされている。しかし、子どもたちだけで学習が成立するののかという現場教員からの不安の声は多い。

学習集団が教師に指導されながら進める学びと、子ども主体で（子ども自ら）進める学びの意味の違いは何か。また、「自ら学ぶ」という学習活動について、異学年集団による学び合いなどを含めた多面的な研究が必要とされている。

## 2 研究の目的

異学年での学習活動の研究としては、桐生（2002）の研究によれば教科学習においても異年齢集団の学び合いによる学習が成立することが報告された。また、木下、小林、水落（いずれも 2003）などの研究により上位学年が人間関係に配慮した学び合いをすすめることや、知識や技能の伝達を教師に求めることなく子ども同士のかかわり合いで学びとっていくことが報告されている。教師の学習者の自主性や主体性を保障するかかわりが有効であることも示されている。

そこで、本研究では、異学年のテーマ別学習集団（学習者がテーマを選択した）で、テーマに対してどの学年とも未習の学習の場面において、子どもたちが自らの力で学びをすすめたり、学び合いによって学習をすすめたりしていく過程を観察・分析し、学習の質やそれにおよぼす要因、学び合いをよりすすめる条件等を明らかにすることを目的とする。

## 3 研究の方法

総合的な学習の時間において、テーマ別選択学習を実施する S 小学校を調査校とし、3 年生から 6 年生までの 74 名が 5 つの異学年集団に分かれて学習する様子を観察し、会話および映像記録をもとに、どのように学習活動が展開されたのかを「学びの過程」と学習者間の「相互

作用の過程」を視点として分析・考察する。

(1)期間 2002 年 9 月 10 日～同 12 月 13 日までの金曜 5, 6 時間目, 全 14 時間の活動。

(2)指導方法 3 年生～6 年生（計 74 名）の児童の興味・関心によるテーマを 5 つ設定し、縦割りグループで自らのテーマを自らの力で学習（小計 10 時間）をすすめ、最後に学習発表会をする。

(3)観察記録方法 教室に 1 台のビデオカメラ, および各教室の各グループに 1 台のテーブルコーダーを携帯させて学習活動の行動と会話を記録する。

(4)アンケート調査の実施

## 4 結果と考察

自らすすめる学びの様相には、学習のめあてに添う目的的活動と、学習のめあてに添わない非目的的活動がある。そして、目的的活動がその場を楽しむような非目的的活動をともにしながら展開されていることが明らかになった。

次に、自ら学びをすすめられない子どもたちには、日ごろの学習でやる気を失い、学習することがめんどろうと思うようになっていくこと、学習によって自己や他者を見直したりすることが少ないことが明らかになった。

また、異学年グループ学習においては、共同の学びにおける対立や衝突が起こりにくくなるなど人間関係に配慮する傾向があることや、下学年の子どもたちの学びの充実度に対する自己認識が上学年のそれよりも高いことが明らかになった。

また、子どもたち自らがすすめる学習においても発展性のある学びが展開されることや、主体的に学習する子どもたちの学びの充実度は高く、「学びがい」といえるものを感じながら学習をすすめていることなどが明らかになりつつある。

学習者主体の学びの展開は、従来の教室内における教授型の一斉授業とは異なる学びの展開の可能性を示唆するものと考えられる。

〔参考文献〕 桐生徹：異学年学習形態を用いた教科学習に関する研究

上越教育大学修士論文 2002 他